

◆ 『サキユバスライク・シンドローム』・第一話 ◆

■登場人物紹介

静森ましろ

透也(主人公)の幼馴染み。
高校二年生で大人しい性格。
手芸部所属。
一見すると地味だが胸の大きさと
整った顔立ちのため、
多くの隠れファンが校内にいる。
とある奇病に感染してしまい、
秘密の治療を行うことになる。





嘉神透也

主人公。高校二年生。
バイトと古武道をたしなんでいる。
成績も運動もそれなりに悪くはない。
ましろとは幼馴染みであり、両思い。

水沢玲香

「臨時保険医」という謎の要職で
透也の通う学校に招かれた。
とある奇病に関する知識と
治療管理の権限を持っている。
理知的でミステリアスな女性だが、
どこか裏を感じる雰囲気を持つ。



猪瀬琢郎

透也とましろが通う高校の
中年体育教師。
ましろが一年生の頃から
執着を見せていた。
体罰とセクハラのせいで
生徒たちからの評判は悪い。



種田康夫

大手商社に勤める中年サラリーマン。
ストレス解消に電車での痴漢をしている。
大人しく肉づきのいいましろに目をつけ
朝の通勤車両で執拗に狙っている。

猿谷

高校二年生。クラスメイト。
透也(主人公)の悪友。
本能(エロ)に忠実な
言動をしているので
女子からの評判はあまりよくない。



柳木

高校二年生。他クラス。
コンピューターに精通している
陰キャな少年。
人付き合いが苦手だが、
不良に絡まれたところで
透也(主人公)に助けられたため
信頼を置かれている。

「——静森さん。俺とつき合ってください！」

静森（しずもり）ましろが告白されるのを目撃したのは、今年に入って二度目だった。

高校一年生のときを合わせれば、透也（とうや）が知るだけでもう六度目になるだろうか？
時は放課後。

舞台は人気がない校舎裏。

まだ五月の連休明けということで、午後五時を過ぎても周囲は明るい。

あちこちにいる運動部員たちのかげ声が、校舎に反射して遠く聞こえている。

「えつと、あの……」

そんないかにもなシチュエーションの中。

告白を受けた少女は、豊かなバストに押し上げられるセーラー服の前で自らの指を絡め、オドオドと視線を彷徨わせていた。

静森ましろは、一見すると目を引くような美人ではない。

快活で誰にでも笑顔を振りまくフレンドリーさもない。

他者に対しても、基本的には小動物のように引つ込み思案だ。

が、寡黙で優しく心配りのできる少女で、よくよく見ればかなり男受けする容姿と性格をしていることを、幼馴染みの透也は知っていた。

小学校の頃から近所で、中学生では男女を意識して気恥ずかしくなり、表面上はやや距離が離れ、引越しし、一年後に戻ってきてから、再び仲良くなった。

ふたりの関係は、どこか要領の悪いましろを透也がフォローしてやる形。

しかし、そのフォローに対し十分過ぎるほどの見返りを、笑顔や付き添いや手料理などという形で透也はもらっていた。

嘉神（かがみ）透也もましろの世話を焼くことを、面倒どころか嬉しく思っていた。

だから今も——透也は校舎裏の木陰にひっそりと隠れ、彼女が告白を受けているのを見守っている。

告白した生徒も、ましろも透也が近くに潜んでいることを知らない。

透也も邪魔をする気はない。ただ、万が一のトラブルが起きたことを心配し、自主的にましろを守ろうと様子をうかがっていた。

「中村君……。その、ありがとう。お気持ち、とつても嬉しいです」

同級生の告白からたつぷりと十数秒が過ぎ、やがて覚悟を決めたようにましろが顔を上げる。どこか弱腰な面持ちでありながら、その瞳は揺れていなかった。

告白の返事を待つ瞬間は、心臓にとても悪い。

告白した本人もそうだろうが、それを静観する幼馴染みの透也にとつても、死刑判決を待つような長い時間だ。

「——でも、すみません。わたし、好きな人がいるんです」

「……………」

ホツと安堵の息が漏れ、ドクドクと高鳴っていた透也の心臓が落ち着きを取り戻す。

「そ、そうか。いや、残念だな。もし気が変わったら教えてくれよ」

告白した男の対応は、透也が見てきた中では潔い方だった。

これが未練がましい男だと、いつまでもましろを帰そうとしないどころか、後日までしつこくつきまとってくる。

もつとも、諦めたふうを装いしつこく迫ってくる輩もいるので油断は禁物だ。

とある不良のひとりは、一年の頃にフラれても関係を追ってきたので、透也が取り巻きごと殴り飛ばして守ったこともある。

「ふう……。よかったあ、何事もなくて」

ましろも男と別れたあと、校門の方へゆつくりと歩き出す。

透也はましろと合流すべく、先回りしようと足早に向かった。



「今帰りののか？ テスト期間明けの放課後にしちや、ちよつと遅いな」

「あれ……？ 透也くん、わたしのこと待っていてくれたの？」

校門を出てすぐの歩道で透也が声をかけると、ましろは驚いたように目を丸くした。先ほどの告白の時に透也が隠れていたことは、まったく気づいていなかったようだ。純粋な嬉しさというか、透也と会えた喜びを笑顔に変え、真っ直ぐに向けてくる。

「違うっての、ちよつと野暮用があつたから。それで今出てきたところだつて」

「そうなんだ。えへへ」

「……言っておくけど、わざわざお前を待ったりはしてないからな」

あくまでも透也は偶然を強調する。

「うん、ありがとう。やっぱり優しいね、透也くんは」

が、ましろは頬を染めて満面の笑みだ。

完全に透也を信じ切っている表情と声だ。

それがまた、可愛らしくて胸が締めつけられる。今すぐ抱きしめたくなるほどに。

「だから……人の話を聞けつてば」

思わず気恥ずかしくなってしまう。

結局のところ、透也もましろには弱いのだ。

中学時代はふたりの仲を冷やかされることも多かったので、表向きはやや疎遠気味になつていたが、その関係性が途切れたわけではない。

むしろ、家からそこそこ離れたこの高校に入ってから、幼馴染みとの関係がより深まった気がする。

——いや、それは語弊があるかもしれない。

中学の頃よりも格段に、透也はましろを女として意識するようになったのだ。

「テスト終わったけど、どうだった？」

並んで歩きながら駅へ向かう。ましろは手芸部であり透也はバイトのため基本的は別々に帰宅している。身長差があるので、透也は歩調をましろに合わせている。

何気ない帰路も、ましろが隣にいれば貴重な時間になった。

「連休明けてすぐにやるなよって感じだよな。普通は気が抜けちまうぜ」

「あ、もしかしてまた夜遅くまでゲームしてたの？ もう、ちゃんと勉強しないから……」

「バイトと稽古だよ。今度別の道場へ顔出しに行けって、師匠に言われてさ」

嘉神透也の祖父はこの町で古武術の道場を開いており、透也もそこそ腕は立つ。そしてその合間を縫って配達物のバイトもしている。将来は都内の大学に通おうと思っており、その生活資金を貯めているのだ。

ここは田舎過ぎるというほど田舎な町ではない。だがやはり若いときの上昇志向を満たすには、少々くすんで見える景色だった。

三十分ほど電車に乗り、自宅まで徒歩十分ほどの帰路を歩む。



ひとりだと退屈なはずの見慣れた道だが、ましろと一緒にだとひどく短い。

「お前の方はどうなんだよ？ この前『一緒にやろって』勉強しに来たら寝てたくせに」

「あ、あれはうたた寝だもん！ それに、勉強して疲れてたからだし」

プクツと小さく膨らませた片頬が、子供っぽくて微笑ましい。

「っていうか透也くん。そのときの写真もう消してくれたよね？」

「もちろんだって。消した消した」

それにしても、寝ていたましろの姿のなんと可愛らしかったことか。

思わずスマホのカメラで撮ってしまったのは半ば冗談だったが、そのときはそれ以上に姿に見とれてしまった。

つややかなシヨートの黒髪と大きな瞳。整った顔立ちも大きな魅力だが、中学卒業辺りからはスタイルが急成長した。

制服の布地を押し上げる巨乳。すらりと伸びた白い張りのあるふともも。全身から匂い立つようなミルクの香り。

昔は人見知りで一見雰囲気在地味なために初見ではややわかりづらかった彼女の魅力が、もはや隠しきれないほどに力強さを増している。

無意識に胸元や足に視線が向かってしまうのを、ある時期から必死に堪えていた。

「じゃー、透也くんのスマホ見せてよ？ ちゃんと写真消したかどうか」

「ダメダメ。彼女でもあるまいし、俺のプライベートを破壊されてたまるか」
こうしたじゃれ合いも何度目だろうか。

普段は奥手なましろが、自分相手だとズケズケと踏み込んでくれるのも心地よい。

——が、『気の置けない幼馴染み』という心地よい関係も、いつしか終わりが近づいている予感がしていた。

年頃になれば恋愛もする。行動範囲も広がり、将来へ向かって歩き出す。

今までなんとなくの流れだった関係性を、自分で選び進める段階にきているのだ。

勝手な思い込みでなければ、ましろは透也に好意を寄せている。

だが、あまりにも近い関係だった故に、透也は言い出せずにいた。

恋愛とは一種のチキンレースに似ている。

告白して結ばれれば天国、否定されれば地獄。

切り出すタイミングを誤れば地獄行き。さりとて様子見が過ぎても、他者にかっさわられる。そろそろましろの魅力に気づく男子生徒も露骨に増えてきた。

直接見たわけではないが——テニス部の有名なイケメン先輩ですら、ましろに声をかけたらしい。

このまま関係を曖昧にし続けても誰かに奪われることがないというのは自惚れに近い。
あと一分で自宅に着く。

透也が深呼吸をして拳を握った瞬間、

「じゃ、じゃあ、わたしが彼女になつたら……見せてくれるの？」

ドキリとした。

その不安げな声音もさることながら、かすかにうつむいたましろの表情が、とても可愛らしく透也の目に映った。

まさか、あの奥手なましろから誘いをかけてくるなんて――。

「え、ま……まあ、な。おいおい、なんだよそれ」

声が無意識に裏返ってしまう。我ながら間抜けだがり繕えなかった。

「もしかして俺とつき合いたかつたりするの？」

もうひとりの透也が、脳内で自分の背中を蹴り上げる。

なにを言っている。

せつかくましろから踏み込んでくれたというのに、なにを冗談交じりで誤魔化そうとしているのか。

今までのポンコツで可愛い幼馴染みの世話を焼いてきた。そんなどうでもいい関係は投げ捨てていい。ましろと恋人になれるのであれば、数千倍も幸せな未来が待っているのだ。

「だ、ダメ……かな？」

赤みを浴びた西日の中で、ましろが胸元で手をぎゅつと握り締めている。

大きな瞳は潤み、戸惑いを帯びて彷徨ったままだ。

「……………」

透也は黙ってしまった。ましろを好きな自覚は昔からあった。けれど、このましろの勇氣引つ込み思案で小動物的なこの愛らしい生き物が、他の男の求愛を蹴った直後に、透也の方へ歩み寄ってきたという事実。

それに胸を打たれるほどの感動を受けていたのだ。

「な、なんとか、言つてよ」

十数秒後、ましろが目を逸らしたまま、小さく不満を口にする。

透也はハツと我に返ると、少女の目の前にスマホの画像ページを開いて見せた。

「これ、わたしの写真？」

「さっき見せるって言っちゃったからな、彼女相手なら」

「……………うんっ」

ましろの頬が緩み、満開の笑顔が咲く。

人目を避けるように物陰に入り、しばらく足を止めて手を握り合った。



「——その画像。結局消さなくていいののか？」

「い、いいよ。そこまで変な写真じゃなかったし」

自宅でもしろがうたた寝して画像を、彼女は結局残してしてくれた。

「まあ、透也くんがわたしのことを好きなら、しょうがないなって……」

「お前な……。言ってる顔が赤いぞ」

「ゆ、夕日のせいだってば！ 透也くんだって赤いよー！」

うつつとうしい帰宅時の西日にも、今日だけは感謝しないとイケない。おそらく顔が真っ赤で緩んでいるのは透也も同じだ。

先ほど握った手を繋いだまま歩いている。ほんの一分の帰宅時間が、とても貴重に思えてくる。

「明日、テスト終わったお祝いに、次の休みにどっか行くか？ バイト代も入ったし——」

「……えっ、いいの？」

「ま、連休中にも俺は働いてたわけだし、バチは当たらないだろ」

「ちゃんと勉強もしないと、都内の学校受からないよ……」

「じゃあ行くのやめとくか？」

「ううん、絶対行く」

「おい……」

真面目な顔で即答する幼馴染みに、透也は思わず苦笑いする。

そんな幸せなかけ合いをした直後、透也とましろは自宅に着いていた。ほんの数メートルで隣り合う家。

昔から変わらない関係が、変わってからも側にあつた。

「じゃあね、透也くん」

「ああ——また明日な」

この日から透也の天国が始まり、同時に地獄の日々が始まる。

そんなことは露ほども考えないまま、透也はましろと別れ自宅へ帰った。



ましろとの想いを確かめあつた日の翌朝。

透也は七時半過ぎの満員電車で、学園へと向かっていた。

カタン、コトン。

田舎町を再開発して生まれ変わりつつあつた透也の住む町だが、利用するローカル線のオンボロさは未だにそのままだ。

年季を感じさせる連結車両と線路は、独特な振動の揺れと軋みの音を奏でる。

町が積み重ねてきた時間の、『古き』を想起するこの音が透也はあまり好きではない。それでもこの電車で頼らねば通学すらままならない。

(やっぱり、将来は都会に行くしかないかな……)

行ったところで、なにかが変わると決まっているわけではない。

それでもとりあえず出てみなければ話にならない。そうしなければ自分の意識すらこの町に呑み込まれてしまいそうな気がする。

(しかし、今日は遅れちまったな。ましろは大丈夫か?)

揺れる車両内に視線を走らせ、幼馴染みの少女を探す。

登校のタイミングは特に合わせていなかったが、お互いに部活の朝練などがないので必然的に同じ時間帯の車両に乗る。女性専用車両がたったひとつなので、基本的にましろはそれに乗っているはずだが、運悪く滑り込めないときは、普通の車両に乗っている。

その場合、ましろはおよそ五分の一以上の高確率で『とある目』に遭う。

「……………」

透也が立つ車両の対角線に、静森ましろを発見する。

シートに座れなければ基本は棒立ちしているはずの彼女は、車両開閉の窓口近くに押し込まれたまま、身動きが取れずに立ち往生していた。

「んっ……」

そのましろから、ほんのかすかにうめき声が漏れた気がした。ガタガタという振動音と乗客の喧嘩にかき消され、はつきりとはわからない。

——が、ましろを見慣れている透也は、一瞬で状況を理解した。

（またかよ、相変わらず狙われやす過ぎるだろ……）

思わず深いため息が漏れる。

ましろは背後にいる、脂ぎった中年男に痴漢されているようだった。

大人しそうで、ぼーっとしていて、隙だらけで、それでいて雄の情欲を煽るような肉感的な体つきが、男を犯罪に駆り立てるのだろう。

しかも満員電車で背後から出入り口に押しつけられれば、腕一本動かせず逃げ道はない。

この快速の車両は目的の駅まで反対側の出入り口しか開閉しないため、たつぷり十五分以上も体を弄ばれてしまう。

ましろは身をよじって男の手から逃れようともがいていたが、どうにもならない様子だった。
（仕方ねえな……）

どうにかましろを助けようと透也は体を斜めに滑らせて移動を試みる。

——が、すし詰め車両内ではうまくいかない。一分の間に数歩進めればいい方だ。頭にかけてはいるが、冷静さを欠いても解決はできない。

透也はましろと痴漢の男を注目しながら、じりじりと歩みを進めていた。



「あ、やつ……」

ましろの口から出た声は、自分でも驚くほど弱々しくか細いものだった。

中学時代の通学は徒歩だったので、初めて痴漢をされたのは高校からである。

初めは満員電車の中で、男から手や下半身を尻に押しつけられる程度だった。

それが徐々にエスカレートし、小刻みに密着させた指を動かし、体をいじってくるようになったのである。

（確かこの人、何回もこうしてきてる。やつぱり痴漢なのかな……？）

普段は大人しく寡黙なましろにとつてはそれだけで強い恐怖とショックに晒され、犯人への反撃など考えることもできなかつた。

露骨な痴漢に関して透也に捕まえてもらったことが何度もある。

——しかし、この脂ぎった禿げ頭の中年スーツ男は痴漢の中でも常習者であり手慣れていた。男はまず、乗車の際にラツシユに乗じてましろを背後から押し込み、逃げ場のない反対の開

閉口まで誘導する。その檻にはめ込んだあとも気を緩めず、まずは鞆を持った手の甲でスカ―

ト越しに尻やふとももに触れる。

一度、二度、三度。ゆっくり押しつけ、小刻みに上下にさする。

ただそれだけの動きだが、十分に柔らかさと肌のすべすべ感を堪能できる。

甘酸っぱい少女特有の汗の匂いをうなじから吸い込むと酔ったように体が熱くなる。

そそり立ったイチモツを、電車の揺れに合わせて服越しにこすりつける。その度にましろの体がびくんと硬直し、恐怖と羞恥に揺れる表情を映り込む窓越しに堪能していた。

いつもならばそこまでの行為だった。

ここまですらば万が一現場を押しえられても、偶然という言い訳ができる。

中年男には家庭もあり役職もそれなりの立場がある。

時折耳に息を吹きかけるくらいのお戯りまでで、それ以上のことはしなかった。

だが、今日のこの男は違った。

日頃の溜まったストレスと、ましろが今まで抵抗の仕草を見せなかったこと。そして久しぶりに目当ての少女を痴漢の状況に持ち込めたことで、大胆な行動へ出た。

「……っ」

そつと男の指先が、背後を向いたましろのセーラー服の裾に潜り込む。

芋虫のような野太い指先が、少女のくびれた腰の背を緩やかに撫で、もぞもぞと這い上がる。恐怖と嫌悪感でましろの肌がぞくりと粟立つ。

今までと遙かにレベルの違う男の行動に驚き、硬直して身動きひとつ取れない。そんなましろの状況を観察するように、中年男はじつくりと腕を伸ばしていく。

「……あ」

直に背中をなぞっていた男の指がするりと抜けた。が、痴漢をやめたわけではない。その五指が尻肉を掬い上げるように下から動く。

さわさわと何度も上下を繰り返したところでスカート越しにぎゅつと尻たぶをこねてきた。

「ひ、あ……あ♥」

奇妙な喘ぎがましろの口から漏れる。背後から密着した男は、まるで上質のマッサージを施すかのように尻肉を弄ぶ。ムニムニと布越しに柔らかい肉を揉み。ふとももから尻まで五指で撫で上げる。

おぞましい中年男の責めに、ましろの額から冷や汗が滲む。

が、どうしようもないほどの嫌悪感に混じって、奇妙な情欲の炎が少女の胸に疼き出す。

（な、なんでわたし、こんな——いやなのに。……あつ）

思考が感覚に塗りつぶされる。

認めてはならないが、性感をじつくりと刺激されて気持ちよくされている。

尻肉を蹂躪する男の手が、びつたりと閉じたふとももの隙間に伸ばされる。

「あつ、そこだめ……っ！」



その逆三角の僅かな空間に指を二本差し込むと、男は白いショーツのクロッチの上から秘所に触れた。

「んっ、あつ……！」

かすかな悲鳴が固く結んだましろの唇からこぼれる。

男の指先がコスコスと白い布越しに秘肉の割れ目を前後する。ゆつくりと大きく焦らすように、時には細かくリズムミカルに。

「やつ、んうっ……。は、ひいっ……♡」

その度にピクピクとましろの体がよじれ、制服の上からでもわかる豊満な乳房が、固く閉じたドアにぎゅつと押しつぶされた。

乳房に感じるその圧力すらも快感になり、徐々に下着がヌルヌルと濡れ始める。

当然、クロッチに触れている男もすっかりと、少女の媚肉の変化を感じ取っていた。

「ひひ、見かけによらずスケベだなあ……。お嬢ちゃんは」

「……ひっ」

他に聞かれないほどの小声で中年男から囁かれ、ましろの瞳に涙が滲む。

公然の場で好き放題に翻られる恥辱に絶望しかけたそのとき、ましろが押し付けられていたドアのガラスにあるものが映った。

「……………」

ましろは正面を見たまま瞬きを二回して、コクツと小さく顎を引く。

痴漢はましろが無抵抗であることに気を良くし、再びセーラー服の中に指を滑り込ませる。
「はっ、んツ……！」

ましろが驚いて背筋を逸らすと。するりと背中から腹へ手を回し、ブラジャーに覆われた
カップの豊乳をすくい上げた。その刹那――。

「ぐぬおっ……！」

男が目を見開いて硬直し、ましろのセーラー服の中を張っていた手が引つ込められる。

同時に男の禿げ上がった額から脂汗がドツと滲み、ぎらぎらとした醜悪な光沢を帯びた。

「はーっ、はーっ……！♥」

十分近く続いていた男の責めが止まり、ましろはぜいぜいと息をつく。

男が痴漢を止めた理由はわかっていた。

（透也くん、助けにきてくれたんだ……）



（やれやれ、思ったより時間がかかっちゃったな）

手足すら動かすのも億劫なすし詰めの満員電車では、ほんの数メートル移動するにも苦勞し

た。

特急快速で人の出入りもないため、じりじりと体をねじって強引に進み、人海を突破したのだ。

ましろを触っていない男のもう一本の腕まで辿り着ければ、あとは簡単だ。

古武道を幼い頃から習っていた透也は、人体のツボを突く技を用い、男の手首を握るだけで全身の動きを封じていた。

が、透也は今のところは捕獲しただけで、痴漢に対して声は上げない。

この場で糾弾しても、人混みに紛れて逃げられる可能性があるし、大声で痴漢だと騒いで、被害者のましろに注目を浴びせたくない。

駅に着くまで残り数十秒、このまま男の動きを封じて、警察に突き出す構えだ。

先ほどましろが窓の反射越しに透也へ送った瞬き二回と小さなうなづきは、透也への救助を求める合図。既に電車で五回ほど、別の痴漢たちを捕縛した作戦だったのだ。

「やってくれたな、おっさん。仕事疲れか？ けど、もう心配しないでいい。当分は毎日ヒマになっちまうからな」

「ぐ、お……あおお！」

透也が更に力を込めると、中年男は顔を青くして痛みに震えている。

久しぶりに暴力的な気分になった。

自分にとって大切な人を傷つけられるのは、こうも怒りが湧くものなのか。

ましろと両思いだと認識したことで、その怒りは以前より激しさが増していた。

「うぐっ……！ はな」

せ。と、中年男は言いたかつたのだろうか、握った手首に力を込めて言葉を封じる。

カタン、コトン。……プシュー。

駅に着き電車の扉が開き、車両から大量の人波が吐き出される。

入り口付近の透也はましろを気遣いつつ、痴漢の手首をつかんだまま、邪魔にならないよう駅の端へ引きずろうとしたそのとき。

「っ……。はあっ、はあっ……。んっ♥」

「——ましろ？」

見れば、降りた吹きさらしのホームの上に、幼馴染みの少女がかがみ込んでいた。

ぜいぜいと肩で息をして顔が赤い。様子がおかしい。

急ぎ足の乗客たちに転がされたら、最悪踏まれてしまう。

焦った透也は、つかんでいた手から力を抜いてしまう。その隙に痴漢男が透也の手を振りほどいた。

男は決死の形相で逃走を計ったが、透也はあえて無視をする。取り逃がすのはしやくだが、この状況においてはましろを救う方が先決だ。

「ましろ、大丈夫か？」

「はあつ、んッ。はあつ……、だ、いじょうぶ……」

慌ててましろの手を引き、人混みから遠ざけてホームの端にかがませた。

「怖くて、ちよつと緊張してたみたい……。だから」

透也を安心させようとしているのか、ましろは力のない笑みを浮かべる。

「そ、そうか」

「ご、ごめんね、せっかく。痴漢、捕まえてくれてたのに……。はあ、 “ んっ……♡ ”

「いや、いいんだよ。俺の方こそ、助けるのが遅くなって悪かった」

かがみ込み、呼吸を荒らげながら途切れ途切れに言葉を紡ぐ少女を見下ろしながら、透也は自分の股間に血流がドツと流れ込むのを感じた。

今まで見たことがない、ましろの姿だった。

重篤な発作などではないようだが、白い肌がうっすらとピンク色に上気し、甘い汗の香りが立ち、ひどく淫靡に感じられた。

服の乱れの少なさから察するに、そこまで痴漢に酷いことはされていないはずだが、このむせかえるような色香はなんなのだろう？

見慣れたセーラー服を押し上げるIカップの巨乳。かんだスカートから覗くムチツとしたふともも。紅潮してとろけた少女の横顔。

その全てが透也の雄の本能を刺激して、思わず喉の奥が乾くのを感じた。

「——君たち、大丈夫かね？」

駅員に声をかけられて、透也はハッと我に返る。

駅員には痴漢のことは告げずただの貧血だと伝え、ましろに再び気遣いの声をかけると、少女はゆつくりと立ち上がって微笑んだ。

「はあ、はあ……。——もう大丈夫だから、ありがと。遅刻しないように急ごつか？」

「あ、ああ……」

幼馴染みの扇情的な姿に戸惑いを覚えつつも、透也は立ち直ったましろと共に学校へ向かった。



ましろとは二年生になってからクラスが違うので、最後は別れて教室に入る。

授業が始まってからもしばらくは痴漢男に腹を立てていた透也だったが、それよりも痴漢されて発情していたようなましろの姿が強く印象に残り、午前の授業内容は脳をすり抜けていった。

（あれはいったい、なんだったんだ？）

ましろが痴漢のテクニクで感じていたのがシヨックというわけではない。

——いや、それもそれなりに衝撃だが、なにかもつと、あのときのましろが、尋常でないような状態に見えたのだ。

頬は朱に染まり、目はうつろで、息も絶え絶えで、汗がじつとりと制服に染みている。

それでいて甘いなんともいえない蠱惑的な匂いと、とろけた表情。

酒に酔った。あるいは、麻薬でも投与され、強制的に理性を奪われたのではないかというように、ひどく異質な姿だった。

(なにを考えているんだ俺は、馬鹿らしい)

そう内心で吐き捨てつつも、初めて見た幼馴染みの淫靡な姿に透也のペニスに激しく屹立し、それを隠したまま過ごすことに苦勞した。

悶々とした違和感を胸に抱いたまま午後の授業を終え、HRの時間になる。

ふと、くたびれた男の担任教師とともに、見覚えのない女性が入ってきた。

「初めまして生徒の皆さん。本日より臨時保険医として三ヶ月務めさせていただきます。水沢玲香といます。短い間ですが、よろしくお願ひしますね」

髪をアップにしてまとめた、妖艶な大人の女性。

スーツの上から羽織った白衣と、縁なしの眼鏡が知的さを醸し出す。田舎の学校ではなかなかお目にかかれないであろう上品な美人だった。

が、淑やかという印象よりは、ミステリアスという雰囲気の方が強い。

柔和な笑顔を見せているが、目の奥に一種の冷たさというか、底知れない質を感じる。そう思うのは、透也が古武道の世界に身を置いてきたせいかもしれない。

「先生！ 彼氏はいますか？ ズバリ！ スリーサイズは？」

隣の席にいる高校からの悪友、スケベキャラの猿谷（さるたに）がお調子者らしく手を上げる。周囲の女子が眉をひそめるのもお構いなしの胆力は、ある意味で尊敬に値する。

「そういうことを周りの女の子に言つてはダメよ？ この年頃はデリケートなんですから、あなたのような子には、そのことを教える方が先ね」

「なるほど！ その後は教えてもらえますか？」

「ええ、そんなことを女性に軽々しく聞いてはいけないと、あなたがしつかり学んだときにね」
田舎のエロガキからのセクハラも、難なくかわせる程度の経験はありそうだった。

その後、担任教師の男から猿谷への説教が一言入ったあと、臨時保険医の玲香は、改めて話をした。

「——では、これから皆さんへ先週行われた身体検査の後半の結果をお渡しします。診断書は他の人には決して見せず、尋ねたり話したりしないでくださいね。もし発覚した場合には厳しい処分が待っています。デリケートな問題ですから。今から確認してください」

「……………」

淡々と臨時保険医の玲香が告げる。その奇妙な違和感に、透也は首を傾げた。

(確かに言う通りだと思うが、処分までするほどのことか?)

玲香がひとりひとりクラスメイトの名を呼び、固く閉じたファイルを手渡してくる。

透也も受け取って中を覗き見ると、様々な数値の羅列とともに、ある項目が目についた。

「これって前回やった変な検査の結果だよな? 血を採っただけじゃなくて、唾液とか検尿までさ。なんだったんだろうな、アレ」

「お前ってヤツは……。さつき怒られたばかりだろ? 人の結果を見ようとすんな」

背後にやってきた猿谷の視線から、透也は体でファイルを隠し守る。

「見えない見てない。さすがにもう校内でエロ本を五回も没収されてるから、これ以上はやべーって。ただ、この『判定』ってなんなんだろうな」

「その判定結果によって、あなたたちには少し特別な授業を受けてもらうことになるわ。だから決して、検査結果は話さないように——いいわね?」

猿谷の行為を見咎めた玲香は穏やかに言ったが、その目は笑っておらず、言葉には重さがあつた。

さすがのエロガキもその気配に押され、元の席へと引つ込む。

クラスへ結果のファイルが行き渡った後、玲香は改めて背筋を正した。

「これから早速その話をするから、ファイルの『判定』が、『R A』、『C J』の生徒は三十分後

までに放課後に視聴覚室の二へ来なさい。三十分くらいで終わりますから、もし用事のある生徒は先に申し出なさい」

「……………」

なんの判定かはわからないが、透也は『XZE』だったのでどれにも当てはまらない。その説明会に出る必要はなかった。それはいいが、しかし妙だ。

たかが身体検査ごときに、わざわざ追加の説明などいるのだろうか？

「あー、マジかよ。俺って病気なのかなあ……。まだ童貞捨ててないのに、死にたくねえ」

後ろの席で、猿谷が頭を抱えてため息をついていた。学ばない男だ。

「お前……。明日にでも処分されそうだな」

口が軽過ぎる。いや、実際言っただけではないが、その反応から察するに、猿谷は間違いないさつき『判定』に引つかかったのだろう。

ただ、『判定』のパターンが何種類あるのかわからないが、その数の多さからして、重大な病気などではないだろう。たぶん。

（まあ、俺は呼ばれなかったわけだし。とりあえずよしとするか）

透也は帰る前にましろへSNSのラインメッセージを送る。

普段はましろ側に部活があるので毎回一緒に帰るわけではないが、今朝は痴漢の件もあったので、家までキッチリ送ろうと思っていたのだ。——が、すぐさま「ごめん。今日は用事があ

るから先に帰っていいよ』との返事がきた。

（『部活』じゃなくて、『用事』——か）

まさかとは思うが、ましろは『判定』に引つかかったのだろうか？

検査の結果がなにか知らないが、そうであればうかつに踏み込むわけにもいかない。複雑な想いに駆られながらも、透也はひとりで帰宅した。



その日の深夜午前二時。

透也は何故か寝付けず、スマホでネットサーフィンをしていた。

有象無象のつながりであるSNS。

管理人がアクセスを煽るために恣意的に偏った内容をまとめた情報サイト。

ノイズに満たされた電脳世界の掲示板で、大勢の暇人が言葉を交わしている。

ふと、その中のひとつ「政府が隠蔽している奇病」というタイトルが目についた。

既に本家のスレッドは消されているようだが、魚拓（コピー）を取っていた誰かが再びまとめて貼り付けていたらしい。

何故か今日の『検査』と『判定』のことが気になって反射的にクリックしたが、コピーされ

たサイトの記事も既に抹消されていた。

やけに嚴重だ。ただの噂話だろうに。

(それともまさか。本だからこそ——ここまで神経質に消したとか?)

眠れない夜独特の、妄想にも似たとりとめのない思考が透也の脳内で踊っている。以前見つけたその大本のページを、記憶の糸を手繰り再生する。思い出そうとする。

十年くらい前にネットに流れたまとめサイトの記事で、確か——正式名称はなかったが、海外で発症したもので、第二次性徴時期の女子のホルモンバランスが乱れ、ある種の脳内麻薬が分泌され、異常に性欲が増すという原因不明の奇病だったような気がする。

当然その記事の中では欲求不満な中年男の妄想話、あるいはエロ漫画を読み過ぎた中学生男子の創作として一笑に付されていた。よくあるゴシップ以下のネタだ。

だが、その記事の一部に具体的な体験談が、生徒の実録という形で載っていた。

発病した本人ではなく傍観者だったが、当時その奇病が発病したクラスメイトがおり、同じクラスの男子生徒が自殺までしたという話だった。作り話にしてはやけに生々しい具体的な描写で、透也の記憶に残っていたのだ。

(……いや、だが。おかしいぞ?)

思春期の女子が発病したはずなのに、死んだのは男子生徒の方だ。矛盾している。おかしい。やはり下らない妄想記事だったのだろう。どうかしている。

(俺もまだまだでしょうもないヤツだな)

ましろと両想いであることを確かめたこと。痴漢からましろ助けたこと。奇妙な検査と臨時保険医の出現という連続の出来事で、透也自身も妄想に囚われてしまったようだ。

彼女を手に入れた幸福感と同時に、その関係を失うことへの恐怖も芽生えたのだ。

(次にましろと二人で帰宅するときは、ちゃんと言わなきゃな)

正式に——自分とつき合ってほしい。俺の彼女になつてほしいと。

そう思いながら、透也の意識はいつしか眠りに落ちていた。



が、透也が決意を固めたその日の翌日から、何故かましろとはタイミングが噛み合わなくなった。週末にテスト明け祝いのでートをしようとしていたが、『ごめんね。ちよつと用事ができちゃつて』と、ラインでましろから告げられた。下校時刻も登校時も、何故かうまい具合に一緒にならない。先日の熱が冷めないうちに、正式な告白をしようと思っていたのに、予定がどんどんと後回しになる。透也は焦燥を感じていた。

「よつ、なにを黄昏れてんだよ。この色男め」

ましろとの想いを確かめてから、ちよつと一週間後の放課後の教室。

クラスメイトの悪友、猿谷が妙に浮かれた足取りで近づき、透也の肩を叩いてきた。

「お前こそなんだよ。テストの結果がヤバかったわりには元氣じゃねえか」

「まーな、追試だよ。でもそれを乗り越えた先にはすっげえ楽しそうなことが待ってそうだからな」

「すっげえこと？」

「あつ。ん、まあ……な」

透也の問いかけに対し、猿谷は苦笑して誤魔化する。

「お前には、ましろちゃんがいるだろうからいいけど。ま、俺みたいなモテない男にとってはありがたえ話だぜ」

「——お、おい、やめとけよ。マジで」

と、横から口を挟んできたのは、ろくに話したこともない隣のクラスの男子だ。だが、その口調は妙に真剣だった。

「わ、わかつてるって！　じゃあな。なにか知らねえが気を落とすなよ」

それだけ言うと、無邪気な笑みを浮かべて猿山は去って行った。ハンドボールの部活に行くのだろう。透也のバイトは今日は休みだった。ましろも手芸部は自由参加だから、今日こそは一緒に帰れるはずだ。

ラインで一緒に帰ろうというメールを送る。数分後に『いいよ』と、返事がくる。

久しぶりに透也はほっとした。



「ごめんね透也くん。前回の約束、いけなくなっちゃって」

「そういうときもあるさ。遊び場は逃げないしな」

校舎を出て電車に乗り、自宅のある駅へと、まだ陽の明るい歩道に行く。

それだけならば、普段とにも変わらない光景。しかしどこか違和感があった。

具体的な言葉にはできない。

透也を避けているわけでもない、拒否をしているわけでもない、冷めているわけでもない。

だが——以前のましろとなにかが違う。

かすかに潤んだタレ目気味の瞳。今日は体育があつたせいか、制汗スプレーに混じつて少女の汗の匂いがした。

「透也くんのテスト、よかつたんだよね。いいなあ、志望してた都内の大学入れそう？」

「これから成績がガクツと落ちなきやな。それよりお前はどうするんだ。一応は進学希望だったと思うが——」

「うん。わたしもそこそこだったから——ランクひとつ上げてみようかな……って」

「……………」

上目遣いで、恐る恐るましろは透也を見上げてくる。

「透也くんと一緒に大学の大学に行きたいって。今度お父さんを説得したいなーとか思ったり」

「……………」

「だ、黙らないですよ。これでも勇氣出して言っただから」

「いや、悪い。なんかすげえ嬉しくて」

ましろに対しては格好つけたがりの透也だが、不意を突かれて思わず本音を漏らしてしまう。それを聞いたましろも頬を赤く染め、押し黙ってしまった。

嬉しかった。

何故か幼馴染みとタイミングが合わなかったここ一週間の不安が、今の一言で全て洗い流されていった。

「ありがとな。ましろ」

「う、うん。えへへ」

ホッとしたように笑ったましろの頭を軽く撫でる。

近くの公園は今は無人で周囲に人はいない。期せずして、最高の機会がやってきた。

「ましろ。——俺とつき合ってくれ」

「……………」

公園に数歩入って立ち止まり、透也はましろの返事を待つ。

たった数秒が永遠にも感じられる黄昏の静寂の中で——ましろは嬉しそうな、同時に何故か困ったような、儂い憂いの笑みを見せた。

「えっと、ね……。うん。それは少し、待っていてくれるかな？ 今年の夏が終わるまで」

「えっ……？」

透也は思わず聞き返していた。

「……わたしね。なんか病気にかかっているみたいなの。でも、今から人に移るものじゃないみたいだし。運が良ければ発症もしないかもしれない……。んだって。あと、治療を受ければ、夏休みが終わる頃には高確率で治ってるって、お医者さんが——」

「だ、大丈夫なのか!? 体調とかは？ どんな症状なんだ!?!」

病気という想像もしていなかったましろの『告白』に、透也は大慌てで詰め寄る。

するとましろはぎこちなく、透也を安心させるように微笑んだ。

「なんていうか、ちよつと目眩とか息切れとかするくらいでたいしたものじゃないらしいんだけど、放っておくと取り返しのつかないことになるみたいで。ちゃんとした治療が必要なの。」

だから透也くんとも、夏休みが終わるまで、あんまり会えないかもしれないし——

ここに至って、ようやく先ほどのましろの言葉の意味を透也は理解する。

『夏休みが終わるまでつき合えない』というのは、拒絶の言葉ではなかったのだ。

病名こそ伏せられたものの、生き死にに直結する重病ではないらしく、透也は胸を撫で下ろした。

「だから——もしダメじゃなかったら。わたしの病気が治るまで待つてほしいな。ちやんと治つてから、正式に返事したいから」

「お前な。俺をなんだと思つてるんだよ……」

透也はわざと大げさに肩をすくめ、呆れた視線を向ける。

それを見たましるも苦笑した。

「わかつてるよ。わたしがもし病気になつちやつてたとしても、もし発症して治らなかつたとしても、透也くんは気にしないってこと」

「なら——」

「だから、わたしのわがままなの。でも……三ヶ月近くも透也くんに待つててなんて言えないから、今のうちに返事だけしておくね」

夕日を背にしてみましたろがどこか不安げな表情で、それでも真っ直ぐに透也を見つめた。

「嬉しいよ。わたしでよかつたら、つき合つてください」

「……………」

トクンと、透也の心臓が高鳴る音が聞こえた。

その姿と言葉で、自分という存在を打ち抜かれた気がした。

「夏休み明けにもう一度告白してくれたら、答えは必ずそう言うから。待つてもらってもいいかな？」

「もちろん」

ゆっくりとため息をつきながら、透也は折れた。

「けど、なにか悩んだり協力が必要だったりしたら、すぐ言えよな」

「うん……、ありがとう。大好きだよ透也くん」

ましろはにっこりと微笑む。

透也の胸に幸福感が生まれ広がる。互いの視線が交わり、どちらかともなく足が動き距離が縮まる。

無言だった。

透也がそつとましろの体を抱き寄せ、ごく自然な流れとしてましろの唇を奪おうとした。生まれて初めての――。

「――おい、待ってよ。ケンちゃん」

不意の声。無人の公園で重なりかけていた二つの影が、弾かれたように遠ざかる。

近所の子供が近くを通りがかったようだ。

「……あ、あはは。そろそろ帰ろっか」

「そ、そうだな」

照れくさそうに顔を見合わせ、並んで帰路へ向かう。

「夏休みが終わるまでお預けつてことで。ときどき治療で会えないかもしれないけどラインとかは必ずするから——」

「ああ」

透也はうなづいて、そのままましろとともに隣同士の家に戻る。

お預けの形で延期された恋人関係。

待ち遠しいが、それでも確実に楽しみはやってくる。

このときの透也はそう思い込み、疑っていなかった。



——五月の半ば。

ましろが透也との恋人関係を病氣治療のために延期する意志を伝えた記念すべき日。

しかしその翌日から、学園の中で奇妙なことが始まった。

明確に『おかしい』と断言できることではない。それでも透也は、違和感を覚えずにはいらなかった。

それは別段ましろだけに限ったことではない。周囲の様子が、以前と比較して明らかに妙な

のだ。

まず——謎のヒソヒソ話が校内のあちこちで発生している。かと思いきや、昼休みなのにぼーっとしていたり、人の流れと会話が偏っている。男女かかわらずだ。

他の生徒たちから避けられているというほど無視されるようになったわけではない。誰とも会話は成立するし、ぞんざいな扱いを受けるわけでもない。

それでも以前より、少しばかり距離を置かれている気がした。それがひとつ目の違和感。ふたつ目は、謎の『グループ分け授業』と『行事』だ。

たまにある予備実習の時間に、クジでいくつかのグループに分かれ、授業が行われた。

それはいいのだが、透也たちのグループの授業内容がほぼ自習なのである。ただでさえ授業時間が足りないのに、二週間に一度は土曜日でも登校しているのに、そんな暇があるのだろうか？ それとなく悪友の猿谷に話題を振ってみたが、「まったく、先公らの考えることはわかんねーよな」と、軽い同意で受け流されてしまった。

更にもしろも、透也と直に会うことをできるだけ避けているような雰囲気があった。

もともとクラスが違うので、そこまで校内で多く会うことはなかったが、気のせいだろうか？（病気のことを不安がっているのか？ ましろは——）

しばらく登下校のときですら一緒に居合わせることがしばらくなかった。ただ、スマホでのラインは通じたので、それで日々のやりとりを仲良く交わしていた。

その数日後——5限目の直後。

トイレに行っていた猿谷が慌てたように教室に飛び込み、透也の元へ駆け寄ってきた。

「お、おい透也！ さっきましろちゃんが廊下で倒れたって聞いたぜ？ 猪瀬が保健室へ運んで行っちゃって——」

「……！！ なんだったって？」

猿谷も、ましろと透也が幼馴染みで仲が良いことは知っている。だからこそ伝えにきてくれたのだろう。

悪友は呼び捨てにしていたが、猪瀬とは、この学園の体育教師だ。

元国体選手とかで威張り散らかしている中年男で、評判はあまり良くない。ましろも一年生の頃、指導と称して胸や尻を軽く触られたことすらあった。

——が、今はその辺りはどうでもいい。

（倒れたってことは、ましろが明かしてくれなかった例の『病気』のせいなのか!?!）

焦燥が透也の足を突き動かし、あつという間に保健室へ着く。が、ノックして引き戸を引くと、そこにましろの姿はなかった。

いつもの保険医に尋ねると、最近校内に特設された、臨時保健室へ向かったのではないかと
言われる。

(そういえば……。あの臨時保険医は、そつちにいるんだらうか?)

透也は慌てて臨時保健室の場所を聞き、ましろの様子を見に急ぐ。

普段は行くことのない校舎の地下——宿直室があるそのフロアの側に、『臨時保健室』の表札があつた。

が、扉を引こうと手を伸ばした瞬間、背後からの声に制止される。

「どこの生徒? なにかここに用かしら?」

眼鏡をかけた臨時保険医の美女、水沢玲香が背後から声をかけてきた。

透也は自らのクラスと学年と氏名を名乗り、友人の静森ましろがここに運び込まれてきた噂を聞き、様子を見に来たと伝える。そのまま保健室へ入れてもらえるかと思つたが、玲香の返事はやんわりとした拒絶だつた。

「——そう、静森さんとお友達だつたのね。確かにあの子は今そこで寝ているわ」

「なら、お見舞いだけでも」

「悪いけれど、それは私の立場上、許可はできないわね」

淡々とした事務的な口調だつた。

「どうしてですか?」

透也がくつてかかつたとき、6限目を知らせるチャイムが鳴つた。

「彼女のプライベートにかかわる問題なの。それより——もう授業が始まるわ。彼女が心配な

ら、あとで言える範囲で答えてあげるから。またあとでいらつしやい」

「……………」

そう言われてしまえば、透也に引き下がる他の選択肢はない。

その6限目の授業内容は、透也の耳にまるで入らなかった。

教師の目を盗んでスマホをタップし、ラインでメッセージをましろに送る。

返信はおろか既読すらつかないまま6時限目が終わる。HRを終えたあと、急いで隣のクラスを覗いたが、ましろはいない。

急いで地下の臨時保健室へ向かうと、中にいたのは水沢玲香だけだった。

「静森さんは貧血で倒れただけだったわ。念のため猪瀬先生に送ってもらったけど」

「そうですか……。ありがとうございました」

大事には至らなかったことに安堵し、透也は帰り支度をして校舎を出る。

が、横断歩道を渡り駅へ向かうとしてコンビニの近くを通ったとき、見覚えのある黒のジャージ姿を見つけた。

(…………?) あれは、ひよつとして、猪瀬か?)

嫌われ者の中年体育教師の猪瀬は、特徴的な姿をしているので、遠目からでも見分けがつく。それだけならば透也はかかわろうとも思わなかったが、玲香の言葉では確か、猪瀬がましろを病院まで送るといふ話ではなかったか?

(じゃあ、ましろもまさか、あの車に——)

猪瀬はコンビニで買った商品がパンパンに詰まったビニール袋を後部座席へ入れる。

続いて運転席へ回ったとき、猪瀬の方が透也の姿に気づいた。

「ウチの生徒か。ああ、なんだ？ お前は確か、……嘉神、だったかあ？ 寄り道してねえで真つ直ぐ帰れよなあ。お前どうせやることねえ帰宅部なんだからよ」

濃い無精ひげのそり残しと、日焼けした浅黒い肌。土まみれのジャガイモを思わせる粗野な顔つきで、猪瀬は悪態をつく。

見た目通りの体力バカであるのに、性格はスポーツマンらしくなく粘着質で横暴だ。

この辺りが全生徒から嫌われている所以だろう。

「ましろ……いえ、静森が校内で倒れたって聞きましたけど、大丈夫だったんですか？」
一刻も早く別れたい気持ちを抑えて透也は聞く。

一瞬、猪瀬は訝しげに透也の顔を見て、その後すぐ運転席のドアを開けた。

「あの……」

「ああ、お前が例の幼馴染みか。ひひ、そうだな……。いるから特別に会わせてやるよ」
すると、助手席のウィンドウが下がり、透也は反対側に回る。

そこにはシートベルトをしたままの、制服姿のましろがいた。

「と、透也……くん？」

シートを倒し気味にした状態で、ハアハアと呼吸を乱している。頬に赤みが差し、どこか熱っぽい雰囲気だったが、それ以上に色っぽく感じられ、透也はドキリとした。

(俺は何を考えてる、こんなときに——)

胸中に疼いた性衝動に戸惑いつつ、透也は慌てて声を出す。

「大丈夫なのか？ ましろ」

「……うん。だいじょうぶ、だよ。ちよつと、貧血……で、ふらついちゃっただけ」

ましろの強がった笑みは、どこか儂げで、後ろめたそうな陰を帯びていた。

透也は一抹の不安を覚えたが、これ以上ましろに心配をかけたくなかったので、安心したふりをした。

「ラインはあとで、返事するから……。あと、ごめんね。今週のお休みもちよつと、出歩けられなさそうだから——」

「気にするな。いつでも構わないさ、それよりちゃんと休めよ」

透也が勇気づけるように言うと、ましろは力なく微笑んだ。

少女の荒い呼吸とともに、セーラー服の下でIカップの巨乳が静かに上下する。その動きに視線を奪われそうになったとき、運転席から伸ばされた猪瀬の手が、透也の眼前に突き出された。

「その辺にしろ嘉神。静森はこれから病院に行つて休まなきゃいけないんだ。調子が戻ったらゆつ

くり話せや」

「……わかりました。静森を、よろしく願います」

そう言われれば、黙って引き下がらざるを得ない。

透也が軽く頭を下げて告げると、対する猪瀬はニンマリと頬をいびつに歪め、舌なめずりを見せてきた。

「……ッ!」

とても生徒に向けるとは思えない醜悪な笑みに、透也は戸惑う。

いったいなにを意味しているのか。少なくとも好意とはかけ離れた仕草だ。どういうつもりなのだ。

「安心しろ。静森の面倒は、ちやあんと俺が看てやるからな。ひひっ」

ネットリとした口調で告げたあと、透也の返事を待たずにウィンドウが閉じられる。

そのまま車はコンビニの駐車場を発車し、交差点を曲がって見えなくなった。

「……………」

なんだったんだ。猪瀬のあの態度は。

透也は、胸を刺し貫かれたような衝撃を受け、しばらく車を見送ったまま立ち尽くしていた。やがてバイトの時間が近いことを思い出し帰ろうとしたとき、あることに気づいた。

「そういうえば病院なんて、あっちの方角にあったか？」

市民なら誰でも知っている総合病院が近くにあつたはずなのに、何故か車は逆方向へ消えていった。だが、他のクリニックなどに向かつたのかもしれないし、単に道路を迂回しただけかもしれない。

だが。

——わからない。猪瀬のあの表情と態度は、なにを意味していたのだろうか。

混乱と疑念を宿したまま、透也は帰宅しバイトへ向かう。

土日の連休中にましろへ何度かラインを送つたが、返信は途中で一度だけ、『心配かけてごめんね。しばらく休むから』の一言だけが返ってきた。



悶々としたまま土日が明け学校へ向かつた月曜日、ましろは休みだった。

その翌日は、なんてことのないようにましろは登校したのでほっとしたが、ましろは絆創膏を体のあちこちにつけていた。

首筋に胸元、ふとももの内側の三カ所だったが、虫刺されだとましろは苦笑していた。他にも、透也の周囲で奇妙なことが起こっていた。

（それよりなんなんだ？ ——学校のこの空気は）

先週から起きていた奇妙なヒソヒソ話が学校全体で——休み時間の校内のあちこちで見かけるようになった。

それだけではない。透也は登校したましろとたまたま一緒に校門をくぐって気づいたのだが、一部の男子たちが、異様な目つきでましろを見ていたのだ。

もともとましろは一見地味だが、よく見れば巨乳の美少女なので見られること自体は珍しくない。

だが、その視線の湿り具合。角度。粘度が以前と明らかに違う。

整った少女の顔立ち、うなじ、つややかな唇、胸の膨らみ、肉感のある白いふともも。

それらを表向きは興味のないフリをしながらも、高頻度で舐めるように盗み見ているのである。

休み時間、放課後、昼休みや二クラス合同の授業中などにかかわらず、だ。

残る半数の男子や、女子もその異様な雰囲気とうすうす気づいているようだが、透也と同じく原因がわからないのか、時折訝しげに首を傾げるくらいで、他の生徒に理由を問い質したりはしない。

そしてまた、謎の『グループ分けの授業』が何度も行われ、更に時が過ぎ六月に入った。うっとうしい湿気が立ちこめる梅雨の季節。

ましろが校内で倒れてからちようど十日ほど経った日の朝——。少し登校には早めの、すし

詰め込み満員電車の中で、透也はましろを目撃した。

(……ッ!?)

様子がおかしい。

透也の位置から横向きに見えた制服姿のましろは異様だった。

乗車口のドアの前に押しつけられ、うなじを耳元まで真っ赤に染めたまま、気怠げな表情で目をとろんとさせている。

背後からのしかかるように体を押しつけている、小太りのスーツ姿の中年男に見覚えがあった。

以前ましろに手を出し、透也に腕を捕まれて逃げた、例の痴漢男だった。